

# 能勢の文化遺産・再発見

大阪府能勢町において、食文化や住文化、年中行事などの伝統文化に関する調査を実施し、その成果を活用したワークショップを実施しています。



古民家で地元の方々とともに行ったワークショップの様子

## 活動の概要

目的	伝統文化を通して住民の愛郷心を高揚させ、地域づくりに貢献／学生たちの伝統文化の実際の学習
連携メンバーおよび役割	大阪府能勢町 地域住民・・・伝統文化に関する情報提供・ワークショップへの協力、参加 財団法人日本民家集落博物館学芸員・ボランティアの皆さん・・・ワークショップへの協力 関西大学文学部教授 森隆男・・・監修・調査・研究の指導。講座の講師・ワークショップなどへの参加 関西大学文学研究科大学院生／文学部学生・・・企画・調査・研究・講座の講師・ワークショップへの参加
活動地域	大阪府豊能郡能勢町
活動期間	2013年～（継続中）
費用	教員と学生の自己負担

## 連携の経緯

能勢町長と、伝統文化を活用した地域づくりの可能性について意見を交換し、まず教員と学生たちが年中行事や食・住文化について調査に取り掛かった。また食と住に関わる文化を体験的に学ぶために、地元の空き民家と日本民家集落博物館（大阪府豊中市）に移築されている能勢の民家において住民の方々とワークショップを行った。

## 解決すべき課題

- 過疎化と高齢化が進む中で、地域の活力が衰退
- 伝統文化の継承



移築民家で子どもたちと伝統食を再現



各戸を訪れるキツネガエリの習俗

## 大学の役割

能勢町で伝承されてきた伝統文化について調査・研究し、その特色を明らかにするとともに今後継承すべきものを提示する。

現在注目しているのは、毎年小正月に行なわれるキツネガエリの習俗である。若者たちがわらで作ったキツネをもって各家を訪問し災いを除くとともに新しい年の祝福を行うもので、現存するのは天王地区だけである。また秋に行われるイノコの行事でも、わらで作った獅子頭をもって各家を訪れ、キツネガエリの習俗と同様の目的で舞う。いずれの習俗も将来地域を支える若者たちが地域内の状況把握するとともに、構成員の一人であることを認識する行事といえる。若者が減少して行事の継続が危機に瀕している今、これらの行事が地域づくりに重要であることを提言し、その存続に向けた方法も検討したい。

また住民と一緒に、空き民家を利用して当地の伝統食の再現を行い、試食するワークショップを行った。取り上げたのは、現地で入手できる食材を使用した「地産地消」の食文化であり、当地の豊かな食文化を再発見する機会になったといえる。

2015年2月、地元浄土のシンアターを会場に、これまでの調査・研究の成果を還元するため講座を実施した。当日は多くの住民の方が参加され、能勢に残る伝統文化の魅力を確認・共有する場になった。



調査・研究の成果発表の様子

## 成果

- 住民が伝統文化の意義を再確認
- 学生たちが伝統文化の現状を具体的に学び、理解を深めた

## 今後の展望

- 学生たちの研究をすすめる上でのフィールドとして、さらに調査を実施
- 研究成果を講座等により地元へ還元
- 高齢化が進んだ地元との世代間の交流

## 研究者の紹介



文学部 教授  
森 隆男  
(もり たかお)

専門は住文化論。日本列島の住まいについて、外観・間取りの構成と配置・神や祖先の祭祀・日常と非日常における人の動線などの視点から分析し、住まいの意味を考察している。

## 現場の声

### ・地域住民の方

学生たちとのワークショップを通して、地元住民が気付かなかったことも教えられ、有意義な時間を共有できました。

### ・大学院生

伝統的民家の中に、便利なところと不便なところが併存している点を体感。フィールドワークを通して、「生きた文化」の魅力を発見することができました。